

今年の4月8日、吉本新喜劇の同期で借金取りの子分役などで数々の舞台に出演していた山田亮さんが旅立ちました。新喜劇の魅力は、いわゆる「弱点」とされがちな個人の特徴を堂々と笑いに変え、それがむしろその人らしさとして輝くことにあります。役者たちは、自分をネタにしながらも、決して卑屈になることはなく、むしろ「それが自分であること」を誇らしげに演じています。そこに、観客は笑いとともに安心を感じる

⑥ 3人目の恩人



のです。そして、山田さんも関西弁がなかなか習得できないことを逆手にとり、広島弁を生かしたキャラクターで、「許してやったらどうや？」というイントネーションが不自然なギャグで笑いをとっていました。

当時19歳だった私にとって、社会人経験を持つ3歳年上の元ホテルマンの山田さんは、「何でも知っている大人のお兄さん」そのものでした。本気の兄のように親しくしてくださり、暇さえあればもう一人の同期芸人と3人で遊んでいました。「肉は買えないから」と、工夫しながら冷凍庫にあった餅とチーズだけで焼いた「モチーズお好み焼き」。今でも

ふと思い出して食べたくなりま

私が新喜劇の脚本を担当することになり、25年ぶりに再会しました。お礼を伝えると、山田さんは笑いながらこう返してくれました。「何を言ってるんや。楽しくてお礼を言いたいのはこっちやで」。あの頃と変わらない、やさしくて頼れる「大人のお兄さん」のままでした。

重ねた経験は、教育の世界で役に立つ。生きた教材になりなさい」と背中を押してくれた島田紳助師匠。

私には、芸人時代に出会った大切な恩人が3人います。1人目は、大学退学を考えていた時に、「絶対にやめたらアカン」と強くアドバイスしてくれた里見まさ

2人目は、芸人と教育の道に悩んでいた時に「芸人として積み

山田さん、大きな心の支えでした